



Title	讃岐地域産刳抜式石棺の再検討
Author(s)	高上, 拓
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 275-284
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105046
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

讃岐地域産刳拔式石棺の再検討

高 上 拓

はじめに

本稿で対象とするのは、古墳時代前期後半に讃岐地域で生産された刳拔式石棺である。以下特に断りのない限り石棺と呼称する。筆者は近年、石棺に関する研究の視点を整理した（高上 2023）が、方向性を示したのみで具体的な資料の提示に基づく論述ができなかった。本稿では、石棺の分類と年代的位置づけについての基礎的な整理を試み、未了の責の一端を果たしたい。

1. 研究史と本稿の視点

讃岐地域の石棺編年研究を推進したのは渡部明夫である（渡部 1990・1995 ほか）。要旨を整理すると、石棺石材の産地同定（間壁ほか 1974）に依拠し、まず石材によって大きく高松市鷲ノ山石製とさぬき市火山石製の二者に区分する。石材ごとに石棺製作集団が存在することを想定し、丸亀市快天山古墳の調査所見を根拠に、型式変化の方向性を見出し、他の石棺にも敷衍することで石棺の型式組列を組んだ。この際、主要な属性として石棺のプロポーションを重視して、大枠で割竹形から舟形へという変遷が示された。

編年観が非常に明快で仮説として魅力的である一方、近年の他素材棺の研究を参照した際にいくつかの疑問が生じる。まず、研究史上石棺は先行する木棺の形態を模倣して成立したことが理論的前提となっているとされる（岡林 2010）。北山は石棺に先行する時期の木棺形態に割竹形のみではなく、舟形を含む多様な形態もあることから渡部の編年の前提を問い直す必要があることを指摘する（北山 2006）。あわせて、木棺の形態研究においては、石棺の成立に先行する段階に複数の形態の木棺が存在することが具体的に示されている（岡林 2010・2011 など）。

加えて着目したいのは、讃岐地域で石棺とほぼ同時期に生産されたことが知られる土製棺である。高松市中間西井坪遺跡で生産され、高松平野西部の本津川流域の古墳で使用された。詳細は後述するが、同時期に複数の形態の棺が生産されたことが指摘されている（大久保 1996）。このように、木棺・土製棺では石棺で時期差の指標とされた形態の差異を、時間差ではなく系統差として理解する視点が示されている。翻って石棺について同様の見方で整理することができないだろうかというのが、本稿の起点である。

さらに、近年の調査で既往の石棺編年上の位置づけと共伴資料の年代観に齟齬をきたす事例も確認されている。高松市三谷石舟古墳石棺は、いわゆる舟形を呈することから既往の石棺編年では最新段階に位置付けられ、前期末から中期初頭の時期が想定されていた。一方、近年実施された調査では、土器類に普通円筒埴輪を含まず、壺形埴輪について讃岐地域で通有の広口壺の形態を留めること、墳丘の側面観が前方部前端にむけて隆起する形態を採ること、墳丘裾部に安山岩板石の垂直壁構造が復元できると推測できることを根拠に、前期前半新相（讃岐2期）⁽¹⁾に位置付けうとする理解が提示された（大久保 2021）。なお、採集資料であるが有稜系鉄鏃の分析では、幅を見つつ前期後半古相（讃岐3期）の蓋然性が高いと整理しており（高上 2021）、これが石棺と共伴すると仮定した場合、大久保の理解よりもやや後出するものと位置付けることも可能である。8節では三谷石舟古墳例は前期後半古相（讃岐3期）に位置づけられている。いずれにせよ、従来考えられてきた石棺の編年的位置と共伴資料の年代観に齟齬が生じている事例である。

以上から、本稿ではまず既往の編年の検証を行う。次に、木棺・土製棺の様相を念頭に、従来時間差を示す属性として理解されていた石棺の形態の差異が、規範となった木棺形態の差異に起因する可能性、すなわち系統差という観点での整理が可能か検討する。さらに、年代的な位置付けについて共伴資料を参照して整理する。

2. 既往の編年の検証

一部は上記論文（高上 2023）の指摘と重複するが、まず既往の編年（渡部 1990・1995 ほか）の前提を検証してみよう。渡部の編年観を支える大きな論拠として、同一墳丘に3基の石棺が埋葬された快天山古墳の調査所見に関しての以下の理解がある。

後円部に配置された3基の石棺のうち、①3号棺が後円部の中心からやや外れていること、②1・2号棺は石室を伴うが、3号棺は粘土槨と想定され、埋葬の簡素化と考えられること⁽²⁾を論拠に、1・2号棺よりも3号棺が後出すると理解する。そのうえで、1・2号棺と3号棺の型式学的特徴を比較し、その差異を型式変化の方向性として捉える。さらに、他資料との型式学的距離を時間差として評価することで編年観が構築されるという構造を採る。結果、各石棺は基本的に直線的な型式組列上に並べられ、編年的位置が定められることになる。

この編年観の前提となる快天山古墳の理解について確認していこう。まず、1950・51年に実施された発掘調査時には、すでに石棺が複数回の濫掘を受けており、石棺相互の先後関係は、層位的な検証では裏付けられなかった。また、論拠のうち①については、墳丘上の埋葬施設配置状況を虚心に見たとき、1～3号棺のいずれもが後円部の中心には位置しておらず、むしろ意図的に中心を空閑として規則的に3基が配置されたようにも見える。いずれにせよ上記の指

摘が正であった場合であっても、3号棺が階層的に従属的な位置にあったことの傍証とはなりうるが、時間差を直接示す論拠としては弱い。また、②の視点も、両者は同時に併存してもよく、系統差や階層差による評価も可能であり、時間差の根拠として積極的に肯定することはできない。

以上から、既往の編年観について、時間差の根拠とされた事例は論拠が薄弱であることが否めない。2節で挙げた反証事例の存在と併せて、再検討の余地は十分にあるといえる。

3. 土製棺の概要

讃岐地域では、石棺とほぼ同時期に土製棺が確認できる。石棺との形態の類似は早い段階から注目され（渡部 1995）ており、土製棺の成立過程に当たっては、「石棺との類似もしくは、それらと共通する祖形態棺を考慮」する視点が提示されている（大久保 1996）。

本稿と関連する部分について、概略のみ整理しておこう。

高松市中間西井坪遺跡は、土製棺の生産遺跡として知られ、箱形・割竹形・円筒形⁽³⁾といった多様な形態が存在することが報告される。生産地の情報として重要なことは、複数の形態の棺がほぼ同時期に、同一地点で生産されたと考えられる点である（大久保 1996）。

また、ここで確認された棺の形態は大久保が示唆したように石棺及び木棺との共通性が高いことが確認できる（図 1）。詳細は 4 節にて整理するが、時期的に先行する木棺を祖形として形態に関する一定の規範が存在し、石棺と土製棺の生産が行われたと考えたい。

4. 分類案の提示

ここまでで、石棺に関する既往の分類と編年にはその前提から再考の余地があること、形態的祖形となった木棺及び石棺とほぼ同時期に成立したと考えられる土製棺の研究状況から、石棺にも複数の形態が同時に存在したことを想定する蓋然性が高くなっていることを確認した。以下では具体的に石棺の分類案の検討を行う。

まず重視するのは、棺の形態（プロポーシオン）である。この点を検討するにあたり、木棺及び土製棺と大枠でどのような形態上の共通性が確認できるかに留意して分類を行う。なお、木棺については腐朽によって形態の詳細が不明な事例が多いこと、土製棺については事例数が少なく、破片資料が多いこともあって全形が判明するものも少ない点から、いずれも形態の把握には復元的考察がなされていることが前提となっている。前者については（岡林 2010）、後者については（大久保 1996）を参照する。

石棺、木棺、土製棺を通観した際に、大枠で棺の形態には共通する点が多く見受けられる。

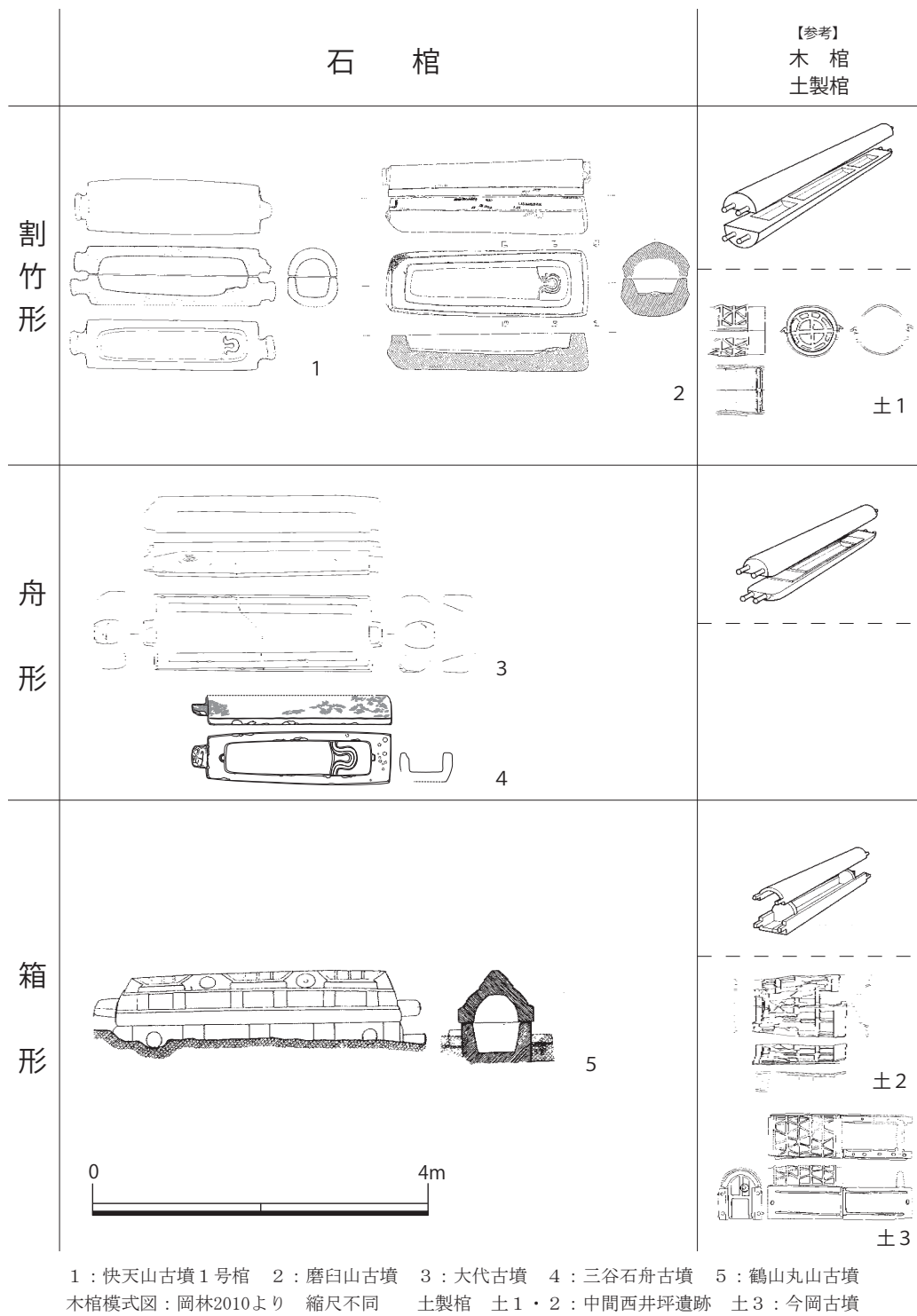


図1 石棺の分類案

本稿では、石棺の分類を主目的とし、他素材の棺の形態との共通性を意識した分類案を提示する。まず、棺蓋と棺身を合わせた状態の形態が断面正円に近い円柱形を呈すもの、緩やかな屈曲を持ちつつ、幅に対して浅く扁平で、断面がやや角ばった楕円形のもの、身部が平板で直線的な底面からほぼ直角に直線的な側面が立ち上がり、断面方形のもの、の3者に大きく区分できる。それぞれ、割竹形、舟形、箱形と呼称する。なお、快天山古墳3号棺や、三谷石舟古墳例など、身部の下半で加工が粗く、断面不定形な資料が認められる。埋葬行為と関連して、身部下半は粗雑な調整を留めることが指摘されており（北山 2011）、身部下半の形状はある程度上記の分類基準から逸脱するものがあることには留意する必要がある。

割竹形について、木棺では小口部まで一体で造形するものと小口部を別部材ではめ込むものが存在し、土製棺については後者のみが確認されるが、石棺においては一石から刳り抜かれたものしか確認されない。割竹形石棺の細部を見ると、つるりしたと円柱形の単純な形態のものと（図2-1～5）、頂部に緩やかだが稜をもち、合せ口を中心として側面にやや平坦な面を造りだすもの（図2-6～8）が認められる。単純化して換言すればやや多面的な形を志向するもの、とでも言えようか。後者については、表面に直線的な突起状あるいは帯状の突帯が付加されている。また、身部の情報がないため割竹形と断定できないが、柏原市安福寺石棺（蓋）では合せ口側面の平坦面に直弧文が施される。多面的な形態のものに外面装飾が伴う傾向が強く、本稿では可能性の提示に留めるが、これらの属性を以て細分することも可能かもしれない。

舟形は讃岐地域産の石棺では事例が少なく、特に対応する蓋部の資料が確認されていないため全形を提示することが困難である。ただし、越前地域や九州島の事例を見ると、こうした形態の石棺は多く認められ、全体に扁平な形態であった可能性が高い。木棺では、底面が緩やかに湾曲するものが想定されているが上記の理由で石棺の底部形態はあまり重視できない。なお、土製棺では該当する形態の資料は現時点で確認されていない。

箱形の事例はさらに少なく、蓋部までの形態が確認できるものは備前市鶴山丸山古墳例のみでやや湾曲し頂部に稜を有する三角柱形の蓋を有する。一方、土製棺の形態をみると同様に三角柱形の蓋があり（図1-土2）、石棺と類似した形態と理解できる。同時に半円柱形の蓋部を有する事例（土3）も確認されており、蓋部のみの資料で従来割竹形の可能性が想定されてきた資料が箱形の身部と付随するような組み合わせも十分に想定可能であろう。安福寺石棺を単純に割竹形に分類していない理由はこの点にある。このように、本稿で箱形とした資料については資料数が増加した際には細分される可能性がある。なお、讃岐では出土例が無く本稿では触れないが、後者の形態については長持形石棺との関係を検討する必要があるだろう。

以上をまとめると、石棺は木棺・土製棺の形態と大枠での共通性を持つこと、細分の可能性は考慮しつつ、形態を基に大別3類型に分類した。

5. 細部形態にみる異素材棺間の共通性

石棺と木棺、土製棺ではそれぞれ素材が異なるため、可塑性や硬度、重量等の差異に起因して必要な製作技術の体系は大きく異なる。また、腐朽耐性の差異によって、資料の遺存状態にも差がある。であるにも関わらず、4節で整理したように形態上の共通性が高いこと、すなわち一定程度の形態上の規範が共有されることは確認できる。ここでは細部形態にみられる共通性をいくつか挙げ、異素材棺間に共通の規範が存在したとする想定を補強しておこう。

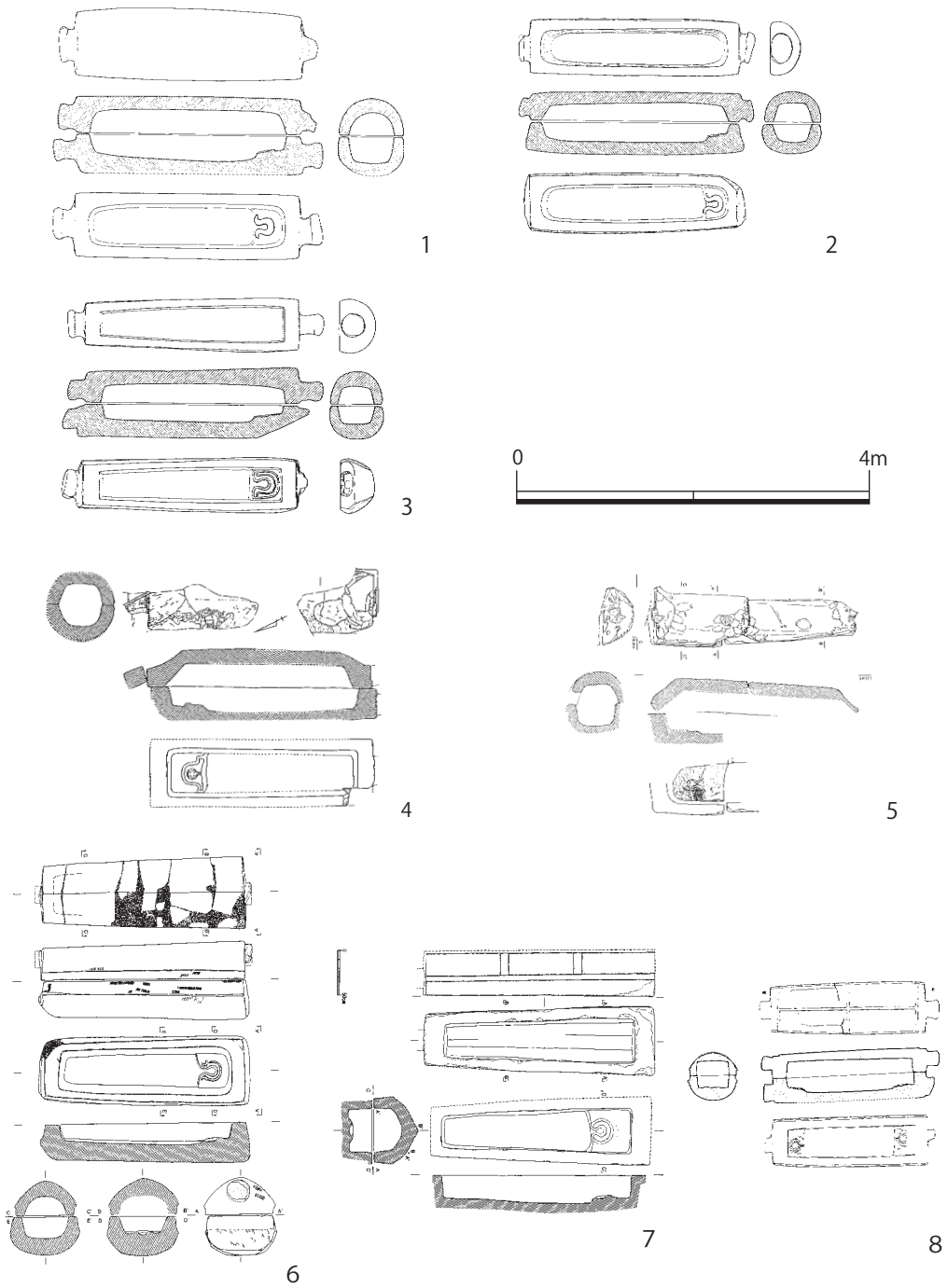
まず、割竹形石棺の小口面を垂直に加工する形態は割竹形木棺の形態的特徴に忠実なものと評価される(岡林 2010)。その他に石棺と木棺の接点として、極めて少数の事例であるが、鶴山丸山古墳例における環状の突起は、佐賀県熊本山古墳例や熊本県向野田古墳例等他地域の石棺にも認められるが、これと類似する形態が、滋賀県雪野山古墳木棺において確認されている。

続いて岩崎山4号墳例(図2-8)、石船塚古墳例(図2-7)では蓋部に縦線と横線が直交する区画の表現が認められる。前者では蓋上面からみて「田」字状に配された細い突線が浮き彫りされる。後者では全容は判明しないが、幅広の突帯が縦横に配される。こうした意匠は中間西井坪遺跡土製棺(図1-土2)にも確認できる。石棺と木棺、土製棺の相互に、プロポーシオンに留まらない、意匠と言っても良いレベルでの共通性も確認できるのである。

もちろん、素材の特性に起因した差異も同時に多く認められる。単純な法量においても、木棺は石棺より大規模なものも見られ、土製棺は反して小型である。また、木棺は刳拔式・組合せ式ともに見られるが石棺は刳拔式に限られ、土製棺は組合せ式に限られる。造り付け式の枕は今のところ石棺にのみ確認されるし、その他にも土製棺は焼成時の破損を防ぐためのいわゆる透かし穴のようなものが認められたり、焼き歪みを回避する機能も期待されてか、突帯が非常に多くかつ複雑な形状で張り付けられる。大枠で形態に共通の規範を有し、一部には上記のように細部形態にまで及ぶ共通性が認められるが、同時に材質の特性等に沿って細部で異なる部分とが認められるというのが実態的な整理となる。諸属性の分析と整理は全く今後の課題であるが、翻って、素材間に特性の差異があり、必要な技術体系も大きく異なるにもかかわらず、異素材で共通の形態を志向する点はやはり共通した規範意識が機能したことを一層強調することができるだろう。

6. 資料の概況

讃岐地域産の石棺を上記分類に照らすと、割竹形が8例、舟形が3例、箱形が1例確認される。資料数では割竹形が圧倒的に多数を占める。他地域では割竹形が卓越する地域は確認され



1：快天山古墳1号棺 2：快天山古墳2号棺 3：快天山古墳3号棺 4：赤山古墳1号棺
5：赤山古墳2号棺 6：磨臼山古墳 7：石船塚古墳 8：岩崎山4号墳

図2 割竹形石棺の諸例

ず、讃岐地域に特徴的な資料状況であるといえる。先に述べたとおり割竹形木棺の形態を忠実に模した形態を採ること、土製棺においても同様の形態が確認できることから、割竹形木棺を祖形として強い規範性のもとでなされた棺生産が主流であったことがうかがえる。

舟形の石棺は図1に挙げた大代古墳例・三谷石舟古墳例のほか、小口部が削平されるが伝香川町浅野出土石棺もこれに該当すると理解できる。讃岐地域では少数派であり、土製棺の類似形態の欠如もこれを傍証する。

箱形の石棺は図1－5に挙げた鶴山丸山古墳例のみである。讃岐地域外に搬出された資料で、極めて特異な形態の資料である。形態的な特徴は九州の石棺と共通性が高いものとする評価もある（中村2010）が、讃岐地域の土製棺に蓋の形状は類似していたり、上記のとおり木棺との共通性も認められるため他素材棺を仲介した文脈で整理することも可能かもしれない。

7. 編年上の位置づけ

石棺のうちかなりの資料は原位置から遊離して二次的に移動していたり、古くに盗掘される等で副葬品等の資料が判明しないものが多い。こうした資料状況であるため、共伴資料によって年代的な位置づけが検証できる資料はかなり限定される。石棺の形態が分類可能な程度判明し、石棺以外の要素から編年上の位置づけ（大久保2013）がある程度可能な資料を表1に整理した。資料数は限られており、安定的な評価とするには躊躇する部分もある。その上でまず確認できるのは、割竹形と舟形については明確な先後関係にあるのではなく、同時期に存在したものと見なせる点である。この結果は、先行する木棺に複数形態が存在する点と親和的である。箱形については一例のみであるが前期後半新相（讃岐4期）に位置づけられる。舟形についてはちょうど合致する時期の資料に欠けるがその前後に存在することから、少なくとも前期後半新相（讃岐4期）において、今回分類したすべての形態が同時期に併存した可能性が高い。この点は土

製棺の状況とも整合的である。

表1 分類と共伴資料から見た編年の位置

分類	資料名	所在地	讃岐編年
割竹形	快天山古墳1号棺	香川県丸亀市	3
	快天山古墳2号棺	香川県丸亀市	3
	快天山古墳3号棺	香川県丸亀市	3
	赤山古墳1号棺	香川県さぬき市	3
	赤山古墳2号棺	香川県さぬき市	3
	石船塚古墳	香川県高松市	4
舟形	岩崎山4号墳	香川県さぬき市	4
	三谷石船古墳	香川県高松市	3
	大代古墳	徳島県鳴門市	5
箱形	鶴山丸山古墳	岡山県備前市	4

以上の整理は従来の石棺の評価に再考を迫るものである。紙幅の関係から一例を挙げるに留めるが、割竹形から舟形へという従来の変遷観に基づき、讃岐地域で他地域に先駆けて石棺が創出された等の理解はその前提から問い直す必要が出てくる。

おわりに

本稿では讃岐地域産の石棺について、既往の編年の検証作業を行い、型式変化の方向性の根拠が薄弱であること、近年の調査成果から編年観に合致しない事例が確認できることを整理した。また、木棺・土製棺の研究成果を参照しつつ、石棺もこれらと大枠で共通する形態的規範が存在したこと、複数形態の棺が同時期に併存することを整理した。結果的に従来の編年観と比べて石棺そのものの編年的位置の細分はややクリアカットなものでは無くなっている。ただし、これは資料ごとにより个性的で、資料数はもちろん共伴資料も少なく、仮説的に設定する型式組列の検証が困難であるという資料特性を踏まえた上で、複数系統の存在を念頭に最大公約数的に設定できる年代的位置づけを意図的に求めたためでもある⁽⁴⁾。本稿の成果は、地域内における石棺出土古墳の位置づけにも影響するし、より広い視点では刳拔式石棺の創出過程の見直しや、異素材棺が成立した社会的背景とその主体、石棺を製作した諸地域間の交流といった諸論点の基礎となる。これらの検討は別稿を期したい。

註

- (1) 時期区分は地域的な編年資料を織り込んだ（大久保 2013）を援用する。仿製三角縁神獣鏡副葬を基準に前期を二分し、前半期、後半期をそれぞれ 2 段階に区分した 4 期区分で、順に讃岐 1 ～ 4 期とされる。また、讃岐 5 期は和田編年 5 期、広瀬編年 4 期後半に相当するとされる。大代古墳、鶴山丸山古墳は地域が異なるがこれを準用した。
- (2) このほか、傍証的に 1 号棺が最も副葬品が豊富で、2 号棺、3 号棺の順に貧弱になることも併記されている。この点も階層差等の要因で解釈することも可能で、直接時期差の根拠とはしがたい。
- (3) 報告文中では円筒形土製棺は大型竪穴建物出土資料として報告があるが、割竹形土製棺の可能性も考えられるとして一定の留保が付けられている。
- (4) 本稿の目的とは沿わないため触れなかったが、使用石材種、製作技法、細部形態、意匠等の諸点は例えば生産体制や地域間交流など、分析の目的に応じて今後整理していきたい。

引用・参考文献

- 大久保徹也 1996 「土製棺」『中間西井坪遺跡Ⅰ』香川県教育委員会ほか、香川：pp. 273-284
- 大久保徹也 2013 「津田湾・津田川流域に所在する前半期主要古墳の編年的位置」『津田古墳群調査報告書 第2分冊考察編』さぬき市教育委員会、香川：pp. 55-60
- 大久保徹也 2021 「三谷石舟古墳の築造時期と石棺製作時期について」『高松市内所在刳拔式石棺調査報告書Ⅰ』高松市教育委員会・徳島文理大学文学部、香川：pp. 36-38

- 岡林孝作 2010「木棺」『日本考古学協会 2010 年度兵庫大会研究発表資料集』日本考古学協会 2010 年度兵庫大会実行委員会、兵庫：pp. 311-326
- 岡林孝作 2011「木棺の諸形態」『墳墓構造と埋葬祭祀』古墳時代の考古学 3 同成社、東京：pp. 106-117
- 北山峰生 2006「磨臼山古墳石棺を巡る一試考」『香川考古』第 10 号 香川考古刊行会、香川：pp. 47-60
- 北山峰生 2011「割竹形石棺・舟形石棺と長持形石棺」『墳墓構造と埋葬祭祀』古墳時代の考古学 3 同成社、東京：pp. 118-127
- 高上 拓 2021「三谷石舟古墳出土鉄鏃の編年的位置」『高松市内所在刳拔式石棺調査報告書』高松市教育委員会・徳島文理大学文学部、香川：pp. 32-36
- 高上 拓 2023「四国の石棺」『四国考古学の最前線』季刊考古学別冊 41 雄山閣出版、東京：pp. 109-112
- 中村 弘 2010「山陽」『日本考古学協会 2010 年度兵庫大会研究発表資料集』日本考古学協会 2010 年度兵庫大会実行委員会、兵庫：p. 382
- 間壁忠彦・葭子 1974「石棺石材の同定と岡山県の石棺を巡る問題—石棺研究ノート（4）」『倉敷考古館研究集報』12 倉敷考古館、岡山：pp. 1-57
- 渡部明夫 1990「讃岐の刳拔式石棺について—快天山古墳・赤山古墳とその石棺の評価を巡って—」『香川史学』19 香川歴史学会、香川：pp. 31-44
- 渡部明夫 1995「香川の刳拔式石棺」『瀬戸内海地域における交流の展開』古代王権と交流 6 名著出版、大阪：pp. 179-208
- 渡部明夫 2002「快天山古墳石棺の再検討及び最近の刳拔式石棺の調査例について」『岩崎山第 4 号古墳・快天山古墳発掘調査報告書』津田町教育委員会・綾歌町教育委員会、香川：pp. 33-41

挿図出典

- 図 1：1. 津田町教育委員会・綾歌町教育委員会 2002『岩崎山 4 号古墳・快天山古墳発掘調査報告書』
2. 北山 2006：図 1 3. 財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2005「大代古墳」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』 4. 高松市教育委員会・徳島文理大学文学部 2021『高松市内所在刳拔式石棺調査報告書』 5. 梅原末治 1938「備前和気郡鶴山丸山古墳」『近畿地方古墳墓の調査 3』土 1・2. 大久保 1996：第 192・194 図 木棺模式図. 岡林 2010：図 4

※全て一部抜粋して改変

- 図 2：1～3. 津田町教育委員会・綾歌町教育委員会 2002『岩崎山 4 号古墳・快天山古墳発掘調査報告書』 4・5. さぬき市教育委員会編 2007『一つ山古墳・赤山古墳・葦神塚古墳』 6. 北山 2006：図 1 7. 北山 2006：図 2 8. 津田町教育委員会・綾歌町教育委員会 2002『岩崎山 4 号古墳・快天山古墳発掘調査報告書』

※全て一部抜粋して改変